
無我の大地

カツラ塚左

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無我の大地

【NZコード】

NZ8536M

【作者名】

カツラ塚左

【あらすじ】

気がついたら目の前に美少女。

そして周りには屈強なガチムチの筋肉の鎧と本物の鎧を着ている兵士達。二重に鎧着ているとは、ふてえ野郎共である（筋肉的な意味で）

誰かこの状況の説明をください。ブリーズ、ブリーズ。幼馴染達と共に召喚された彼の明日はどうちだ。それは美少女だけが知る…のだろうか。

導入部『僕らは今日日本でひょっとした話題をお茶の間に提供してくる... 節』（新）

誤字、脱字等気を付けていますが、どうしても出てしまうのです。ですから気が付きましたら、ご指摘して下さると幸いです。

まだじのように動かしていくかを決めていないので、軸がブレブレに成ると思いますが、読んで頂けたら嬉しく思います。

「よつこ、このクソッたれで理不尽な世界へ」

そういうって彼女はそつと微笑んだ。その笑顔は、穢れを知らない無垢な少女の様だった。もちろん実際そんなわけないと本能的に理解しても尚、その笑顔は魅力的に見えた。それは勿論、口汚いことを云つても騒る事が無かつた。

「説明、要ります?」

それは『僕達』に答えを求めているわけではなく確認という色合いを強く感じた。ここは喚き散らせばいいのか…それは好ましくないだろう。周りの状況が全く、微塵も見えていないというならその選択も有りといえば、有りかも知れない。でもその選択肢は存在しない。今出来ることは全て「是」と答え、状況の把握に努めるべきだろう。何故なら産まれてから今まで空想の世界でしかお目にかかる（実際に見た事があるではないけど）事がない鎧を纏った屈強な兵士に得物を向けられて冷静で居られるかと聞かれたら、無理ですと声を震わせて云うか、声が出ないかだろうけど。まあ…

「では、応接間まで丁重に連れてきなさい。私は先に行くので」

僕は、間違いなく付属品、おまけ、手違い、取り合えずそんな類の物ではないだろうか？あとそんな鈍く光る先端のとがった金属のついた棒こつちに向けないでほしいなあ…

唐突だが、僕の周りについて語りうると思つ。自分語りをするよりは痛くないだらうけど、聞く分にはどうちもどつちと思わないでもない。

僕には幼馴染が二人居る。一人は眼鏡をかけ利発そうな少女で、髪を肩口で切りそろえている。容姿は十分整つてゐるといえるのではないだろうか。もう一人はどこにでも居そうな特徴の無い、いたつて平凡という言葉が似合う少年。容姿も成績も運動も粗つたかのように中の中ぐらいになつてゐる。身長でさえ平均的なにはもう冗談にしか思えない。寝癖なのかなんなのか、毎度髪型が跳ねている。もういい歳なのだから整えればいいのに。…平凡な彼だが、なぜか彼の周りには男女問わず人が集まつてくる。…人類を惹きつけるフェロモンか何かを出してるのだろうか？しかも、寄つてくる少女達は毎度、毎度一癖も二癖もある際物揃い。美人なのは良い事だが、何故毎回それ以外に厄介ごとだつたりが付隨しているのか疑問が尽きない。これもフェロモン（＊実際にあるかどうか確認できていません）の効果ではないだろうか。研究して、証明して、実験して学会に発表したらノーベル賞を受賞出来るのではないかと僕は常常々おつと関係ないことにまで話がいつてしまつた。

そこでどうやつて先程の様なファンタジー過ぎる状況になつたのが、今朝の行動から思い出していこう。

いつも通りの時間に起床。毎度の事ながら、七時にはもう仕事に行つていない両親には頭が下がる想いである。妹は相変わらずギリギリまで自發的に起きようとしないので、僕もそれに倣つて懶々起

こすような浅慮な行動はしない。決して昔起こしたら、反射的に飛び出してきた足に男のシンボルが無残にも打ちぬかれて悶絶し、遅刻したからではない。またその際、定時（妹にとつては）に起きた妹から「…朝から人の部屋で悶えて何してんの？」と半眼で見られたことなどないのだ。ないつたら、ないのだ。

手早く朝食を済まし、朝のニュースを見ながら制服に着替え七時三十分に誰も返事を返してくれるはずもない『いってきます』を玄関先で零し、外に出ると毎度ながらお隣の幼馴染がきつちりと待っているのだ。眼鏡をかけた出来る少女。むしろ才女。才媛ではないので悪しからず。

「おはよひ、久^{ひさし}」

「おはよひ、真尋。相変わらずキチツとしてるね」

尊敬するよ、と心の中だけで呟く。彼女にとつては当たり前なので言われても何のことか分からず、曖昧に返事するだらうから、言わないのだ。

「そう?」

「そうだよ。…それで相変わらず幸助はまだ夢の中なのかな?」

「さつき電話したら寝起きの声で『うつす』って云つてたから、あと十分くらい掛かる気がする」

「…いい加減自力で起きるといつひとを覚えたほうが良いのでは…つと、真尋に云つても仕様がないか」

さりげなくモーニングコールが日常化していることを告げられて、ちょっと羨ましく感じる十七の秋空。そこからんに可愛い幼い女子落ちてない?もし落ちていても育てられないけど。でも光源氏になるのも悪くない…あれ? そうちょっと彼女が欲しくなったんだつた。無い物は無い。諦めが肝心である。

無機質な目覚ましより、女性に起こして貰つた方が遙かに気持ちよく起きれるだろう。少なくとも僕は、大多数の男性なら、きっとそうだろう。

今朝の一コースから始まり他愛もない事をツラツラと幼馴染（眼鏡）と話していたら、本当に十分ぐらいで向かいの家からガチャリと幼馴染（平凡）が出てきた。あんたら、出来るのか。それだったら三人一緒に学校向かうにやめよう。というか、やめてください。幼馴染 カップル+出涸らし（幼馴染）はあまりにも侘しい。そこのく男子生徒から失笑と同情を同時に買つてしまつような真似は控えたい。

「うーっす。ふああーあ。あ、真尋宿題やつた？」

「コーヒーね」

「……タダでいいじゃないか」

「ちょっとしたリスクないと直んじゃないからじゃないか？」というか、俺には聞かないのか

「どーせ、『自力でやれば』としか云わないじゃないか。そもそもクラスが違うだろ」「仰る通りで」

疎外感を感じないこの雰囲気…カップルではないな、多分。良かつた、良かった。男子生徒から不名誉極まりない称号を得ずに済んだようでそつと安堵のため息を漏らす。その際にも着々と学校へ近づいていく。

「あー、そんじゃ、放課後校門で待ち合わせして帰ろうぜ」「幸助が忘れずにメールして、且つ誰からも誘いがなかつたらな」「私もそれで」「あんたら……ま、まあそうだな。そんじゃ、久放課後なー」

「またね、久」

「はい、はい」

僕と幼馴染達はクラスが違う。ありがとう校長先生。愛してる…ごめんやつぱり嘘。ゾラはノーサンキューな！本当の自分を曝け出したらきっと僕、校長に胸キュンするよ。…それはないな。馬鹿なことを考えながら一人教室に向かう。べ、別に寂しくなんてないんだからねっ！

普通のクラスのうちでは普通に授業が終わつた。Dクラスでは何故か教師と男子生徒が木刀で叩き合つていたらしい。おかしいな、うちの学校そんなドメステイックな授業ないはずなのに。幼馴染達がいるBクラスは治外法権だから気にしないことにしている。どうせ、毎度お祭り騒ぎでしょ。担任すらそれを煽る様な発言するつてどうかと思う。ストッパーいないじゃないか。同じクラスじゃなくて良かった。そんな学校の一コマ。

そして幼馴染（平凡）からH.R.中にメールが来た。一緒に帰ろう、だそうだ。生憎誘われなかつたので『快諾』とメールにて返信し、校門前にて待つこと五分。幼馴染達登場。

「わりー、遅れた。『ごめん、ごめん』

「幸助が携帯鳴らすからだよ」

「そういうなら久がメール返すからだろー。」

「人のせいにするんだ?」

「…するんだ?」

「…申し訳ございませんでした!」

「馬鹿はほつといて帰ろうか」

「ええ、そうね。馬鹿はほつといてね」

「あんたら容赦がありませんねえ…」

幼馴染（平凡）をからかいながら帰り道を歩いてると幼馴染（平凡）が突然立ち止まり、周りをきょろきょろと見回した。そんな挙動不審な行動されたら思わず距離とったくなるじゃないか。

「…なあ、なんか聞こえない?」

「…植田幸助少年はどうどう壊れてしまつたようですよ、神原さん？」

「ええ、そうですね。これは黄色い救急車を呼んで窓のない病的に白い部屋に隔離してもらつたほうが良いのではないでしょうか、笹次さん?」

「こやいやいや、何恐ろしいスピードで心の距離あけてるの!/?泣くよーじゃなくて本当に何か聞こえるんだってこいつち来てくれよー。」

僕と幼馴染（眼鏡）はお互に向き合こじょうがないと言わんばかりに肩をすくめる動作をしてから、幼馴染（平凡）に近づいた。今思つならば、この時なら逃げれたといや無理か。彼女の性格考えるに網に掛かりかけた相手をみすみす逃すわけがない。どっちにしたつて最早進退窮まつていたのではなかろうか。

「せ、聞こえ…」

幼馴染（平凡）に近づき、彼が鼻息荒く声を荒げた瞬間僕らはこの世界から消え去った。

後に僕は「これって神隠しだよね」と零すとその声が聞こえたのか諸悪の根源に「神なんていませんが？」とこやかに返された。ファック！

導入部『僕らは今日日本でちゅうとした話題をお茶の間に提供していく… 答』（後

どうも皆様方初めまして、カツラ塚左です。

小説：もどきと称しましょうか。兎にも角にも初めてのなので至らない所ばかりですが、そういうたどころも含めて諸兄に指摘や感想をいただきたいな、と考えております。

これが私の処女作となるわけですね。男なのに処女とはこれ如何にと軽く下を入れてみました。

生温かい目で見ていただけたら幸いです。

正直、プロット何それ美味しいの？推敲、何それ歌？見たいな感じです。

基本不定期更新に成ると思います。自分の考えた人物のキャラクターさえ掴めてない…。後々ちゃんとできる筈…できるといいな。次回から幼馴染（）みたいな表現はしません。今回だけです…きっと。

全く関係ないですが、幼い女の子のくだりで友人の発言を思い出しました。

非難訓練の時「おはし」もしくは「おかし」つてありますよね。本来は、

お…押さない

か…駆けない

し…喋らない

なんですが、友人は胸を張つて

お…幼い

か…可愛い

し…小学生

といいやがりました。流石ロロコンは格が違つた…！

それでは、またいつか。

一、『質疑応答、そして』（前書き）

不慣れなので変な感じに成っているとは思いますが、それでも読んで頂けたら嬉しく思います。

では、失礼します。

一、『質疑応答、そして』

周りを屈強な兵士達に囲められ、気軽に幼馴染達と声を掛け合つのも憚られる雰囲気を維持したまま歩くこと数分。パニックになつていた僕は少し周りを見る余裕が出てきた。幸助？きっとどうにかなるんじゃないかな。真尋は…僕と同じで周りを盗み見ている。頭も良いからきっと色々考えているのだろう。

それとなく辺りを見回すと大理石で作られているかのように白く光沢を感じる材質が床に壁に使われていた。石柱のようなものもあり、どことなく古城の様な感じではあったのだが、さつきからちらちら視界に入る電光掲示板のよつな物体がその感想を綺麗にぶち壊していた。…ファンタジーならしそうがないと勝手に納得しておいた僕は周りの兵士達に視線を走らせる。

（なんというか、科学的な技術は発達しているけど武器が古風のはなんでなんだろうか？）

そんなことを考えながら歩くことさらに数分、気が付いたら目の前には簡素な造りながら決して安価なものではないと僕のようない般庶民でさえ分かる扉があった。その扉の前には僕らの周りを囲っている兵士達よりも明らかに上等な鎧を着ている兵士が二人いた。

「待て、そいつらが此度呼び落とされた奴らか？」

「どこと無く、見下されていいるような、人として扱われていないような印象を受けた。もっとも、それは強ち間違いではない」ということを後に確り認識することとなる。呼び…落とされた…？呼び出された、ではなくて？疑問が頭に浮かぶもここで声を出すことは憚られるので、頭の隅にチェック項目として刻んでおく事にした。

「はっ！その通りであります！」

「そうか…暫し待て」

そういうて彼はもう一人の上等な鎧を着ている兵士に視線を向けてからノックし、「入れ」と声が聞こえてから中に入つていった。こんな扱い初めてだつたが、不満も、戸惑いも、この先に待ち受ける不安を考えるとスーッと霧散してしまつた。

少しも気が休まることも無いまま無言で待つこと数分…最も僕にとっては十数分に感じたのだが、扉が開き中から「入れ」と声が聞こえる。その声に押されるように僕たちは中に滑り込むように入つた。また、その際入れ違いに兵士が此方を一瞥して出て行つた。

その視線に僅かにイラつきながら中に視線を移すと中世の貴族の様な部屋が眼前に広がつていた。テーブルも然り、ソファーも然り、絨毯も、部屋を彩る調度品も僕が一生掛かつても手に届かないものではないかと思えるほどのものだつた。部屋に配置している調度品が部屋全体の雰囲気を崩すことなくがつちりと嵌り、それでいて存在をさり気無く主張しているわけではないのに認識させるような配置…凡愚の僕に出さえ分かるのだからよつぽどではないだろうか。

そうしてやつと氣付く。ソファーには先ほど僕らの前にいた美少女がいた。金色で見るからに柔らかそうな髪に浮かぶ天子の輪（キ

ユーティカル的な意味で)、顔全体のラインも余りにも美しすぎた。まるで人形のような…いや、人形職人が見たら職人をやめてしまいたくなるほど美しかった。そのラインの中に浮かぶ森のように深い色を浮かべる深緑の瞳、真っ直ぐハツキリとした形を持つ鼻梁、ふつくりと柔らかそうな唇…まるで空想世界のお姫様が出てきたみたいだった。もつとも紡ぐ言葉は毒を含んでいそうだが。そしてようやく気付く、彼女の後ろ影のよつに届るローブで顔を覆い唯一見えるといつてもいい口元さえも隠している黒子のような存在に。

「それで先ほどの質問ですけど…説明、要ります?」

そうして此方を見ながら放つ彼女に幸助は動搖したのか目で見えるほど狼狽し始める。…僕も見惚れていたのは内緒だ。

「あ、はい。お願ひします。あ、お…、僕の名前はつえ…」「貴方の名前に興味なんかないの。それで説明要るのよね?」

どことなく沈んだ様子の幸助を横目で見つつ僕と真尋はお互いにチラッと視線を向けて、真尋が頷くのを見て任せることにした。

「その前に質問しても構わないでしそうか?」

「そうね…いえ、やはり説明を全て聞き終えてからにしてもらつて構わないかしら?」

「それもそうですね。久も幸助もそれでいい?」

「…そうだね。うん、それでお願いします」

「あー、うん」

未だにダメージを引っ張っている幸助は無視しておこいつ。それがベストな選択の気がする。

「よろしい。それでしたらヴェル、説明して差し上げなさい」

「恐れました。僭越ながら主に代わり私が説明させてもらいます。先にこの世界の成り立ちから説明します。まず今我々が居る国は『トレオン帝国』他にも大小様々な国がありますが、今は省かせてもらいます。この國の他と違うところは大陸でも唯一といつても良い『マガ』について研究している國になります。マガについては後ほど質問があればお答えします。それにより生活水準が上昇したのですが、生憎それを独占していまして、其の事を快く思わない輩がいるのです。当然そうなれば戦争…とはいきません。我々は『マガ』の領域から出てくる種族…通称『ハイジン』の脅威から同盟を結んでいるのです。それを表立つて破棄するということは孤立するということです。そうなれば待つのは破滅だけです。そんな中で胆となるが諜報活動となります。…要するに重要人物殺して成り代わるか、攫つて吐かせるか、そういうことです。大変単純で分かりやすいですね。諜報活動で自國のものと万が一にもばれると易々と自國の国宝級の情報、もしくはそれに準ずる研究結果を接收する絶好の交渉材料となるわけです。そこで彼らは異界の人物をこの世界に落とすことにしておられます。労働力にも成りますので、こちらの取つて不利益はほとんど無いといつても過言ではありません。そして今回落とされたのが、貴方達で現状に至ります。…主説明はこのような形でよろしかったですか？」

「…ええ、そうね、大体そうなります。ここからは私が答えます。…さて質問、あります？」

さつきヴォルフて人（？）さりと攫うとか殺すとか言つていたけど…幻聴…だといいなあ。彼（彼女？声が籠つていて判別できなかつた）が云うには、大きな敵が居るから今現在「同盟」という形として纏まっているだけで実際はいつでも虎視眈々此方を狙つている…と？そこで足がつかないように異界から人を呼び出す、と。…お先真つ暗な未來しか想像できないのが、凄く胃に優しくない。

「あ、質問よろしいですか？」

「はい、どうぞ。目が開いているか閉じているか良く分からぬ方」「（あれ？行き成り人の身体的特徴を貶された？）…でしたら『マガ』とは何でしょうか？」

「やはりそこからいきますか。そうですね、言つならば空氣中に漂う僅かな毒素、といった所でしょうか。人体に害はさほどありません。貴方達にとつては無害かどうか知りませんけど。その毒素の源泉ともいえるのが『マガ』の領域といわれる場所です。」

「成程…『マガ』とは毒素…毒素つ！？」

「ええ、毒素ですが…何か問題が？」

「（問題なんて有り過ぎだつて…）…ソウデスネ、問題ナイデスネー」

「そうですか、その『マガ』の領域から出てくる種族を何時頃から『ハイジン』と呼ぶようになりました。彼らが何を考えて行動しているか全く分からぬのが最も厄介なところです。過去に意志の疎通を図つた者も居ましたが、結局無理でしたので。兎にも角にも私達は言葉が通じない、本能で生きている…そういう生き物だと結論付けています。」

毒素の飽和状態の場所から出てくる『ハイジン』と云われる本能で生きている生物に襲われる世界、と…お先真っ暗感が加速度的に上昇してきた気がする。いや、気ではなく実際まだ実感が無いのに情報だけ知つていくと冗談みたいで信じられない。信じられないけど、今、僕らがここに居るということがある意味ファンタジー的な要素だと少なからず思つてしまつている自分が若干憎い。むしろ盛大などつきりだと嬉しいね…中学二年生が掛かりやすい病気とは無縁なはずだったのにな…。そこで頷いている幸助が気になつて仕方ない…頷いておけばいいとか思つてない？

「あ、もう一ついいですか？」

「連續して同じ人からの質問はお断りです」

(なんでだよ…)

「なら、次は私が質問してもいいですか？」

「ええ、どうぞ眼鏡ちゃん」

「……その『マガ』については分かりましたが、その有用性とはなんですか？」

「悪くない質問ですね。毒といつても必ずしも有害ではなく、その成分の中で『法理気』と通じる部分があったことから他のことが発見できたわけです。その『法理気』は『トレオン帝国』のみの技術で専門的なことは省きますが、解析を重ねるとその中から物質化出来るものがあり、その物質化されたものが今私達の足元、周りを囲んでいるものになります」

彼女はそう云つて僕たちの周りの手を向けた。成程このあべこべさはそういうことか。なんで武器がアナログ的に対して通路などを構成している物質が僕達の世界の基準に何故近いのかはよく分からぬけど。…でも先ほど何度も目にした電光掲示板的な物体も『マガ』から抽出し、物質化したものだろうか。一体どれほどのものが出来たのか、出来るのか興味が尽きない…でもそれのどこが凄いのかまだ分からないんですけど。

「…それだけですか？」

「いいえ、勿論それだけではありません。この物質の素晴らしい所は軽く、硬い等の特性にあります。そして毒から生成しているので元手をかけず、良質の物を手に入れられるという事も他国が喉から手が出るほど欲しがる要因になつてているのでしょうか。…ついでに言っておきますけど、その床などは一般的な大人が武器で破壊を試みようとしても傷など毛筋ほども出来ませんよ」

「それは…恐ろしいですね…。ただ、他の特性もあるのではないで

すか？」

「それについてはお答えできません。教える必要も無いので」

「…分かりました。」

「もう質問はありませんか？なら、」

「あ、俺も質問があります！」

「……どうぞ、印象に残らない程残念な人

あ、さつきまで只頷くだけの置物になつていた幸助が、また沈んだ。やつぱり影は薄いんだ。あらゆる意味で平凡だからなあ。でも気が付いたら心の中にするつと入り込む彼だ、きっと何かをしてくれる！良くも悪くも彼はトライブルの神に愛されている（と僕は思つてゐる）から。

「え？ あ、はい。…呼び落とされたってなん…でどうが？ 呼び出された、ではなく？」

「それについては今から説明するつもりでしたのに…まあ、いいでしょ。変わりませんものね。貴方達の様な異界人を呼び出すに当たつての条件がいくつかあります、そこは省きます。ある意味無作為に選んでこの世界に引きずり落としています。帰れるか、どうかと聞かれたらどうでしょう？ と私は言葉を返しましょう」

「ちょ、ちょっと待つて下さい…！ それは帰れないって事な…！」

「どうでしょうか？」

「どうでしょうね？ 試したこともありませんし、返す気も元々ほとんどありませんから。仮に帰れたとしても、この世界の常識になってしまつていたら向こうは窮屈に感じるのではないでしょうか？ ほら、倫理觀とか人権とか投げ打つておかないと死んでしまいますし、ね？」

「ど、どうこのことだよ…！」

「はあ… てっきり気が付いているのかと思つていましたけど、案外鈍いですね、貴方。後ろの二人はなんとなく気が付いていたみたい

ですよ？こんな事を態々教えていいのだから、貴方達にもう自由なんて無いの。といつても呼び落とされた瞬間から貴方達の命は私の中にあるといつてもいいのですけど。分かる？貴方達はここで生きるしかないの。どういう扱いであったとしても、ね。嫌なら今この場で眠つてもう一つになりますけど…永遠に

彼女がそういった瞬間幸助の首にムチ（のよつなもの）が巻きついていた。その先を辿つてみると彼女の後ろに控えていた箸の「ゴヒル」が彼の後ろにいた。何時の間にと驚くと同時に、心のどこかでやつぱりこうなつたかといった感情もあつた。これは云うならば、予想通りの展開。ええ、分かつていましたよ、分かつっていましたとも！キナ臭いのがブンブンしてたからね…。

世界情勢と諜報そして異界人を呼ぶということからなんとなーく職業の選択の自由は是非とも頂きたい。リクートはこの世界にもあるのだろうか…。

「えつ…！？」

「…動くな。動くとうつかり頸を折つてしまいそうになるだろ？？」

「まあ、安心してください。少なくともいきなり殺しあうような事態には投げ込みませんので。貴方達の適正を調べてそれに沿つた適正職に宛がいましょう。」

小声でポツリと言つた、適性が無かつた場合はそれ以下の扱いになるかもせんけど…は何故か僕の耳に届いた。後々考えれば届いたというより、届かせたということが分かつたが、生憎その時僕にはそんな余裕は微塵も無かつた。この状況から知りえる情報を最大限得ようとして必至だつたのだから。

彼女が手を鳴らすと扉が開き上等な鎧を着た兵士二人を筆頭に見覚えのある屈強な兵士達が僕たちを囲んだ。三人を孤立させるかのように別々に取り囲むのは何故だろう。一緒だと問題があるので

うか。…つていうか怖いんだけど、本当に！

「よひしー、では別室へ連れて行きなさい」

そうして僕らは別々に兵士に囲まれて部屋から連れて行かれた。

相も変わらずまた屈強な兵士達に囲まれた僕。最初十二人いたより三分の一に減ったけど、特に変わらない。職業で兵士とか出たら彼らと同じ釜の飯を食べる仲になるのだろうか。そうして段々と友情を育んでいき…うん。駄目だ、どうしても僕が訓練に耐えられる気がしない。というより耐え切ればボディビルダーみたいな素敵ボディになるのだろう…それは遠慮したいものだ。ドキッ！ガチムチだらけの訓練所っ！！…誰得だよ…。そうしてどうしようもないことを考えていいないと耐えられないである。想像してみて欲しい。ガチムチに囲まれた学生服を着て鞄を持つている学生の姿を…とももシユールだろ？怖いだろ？…怖くない？ごめん、少なくとも僕は膝が笑ってしまうほど怖いんだよ。だからどうしようもないことを考えるんだ。…現実逃避しているとも云うけど。

そうしている内に目的地に着いたのが目の前に居る兵士は止まって、前に居る人物に話しかけていた。気付くのがもう少し遅れていたらぶつかったかもしねー。

「何か用？」

「異界人を連行してきました」

「ふーん…それが今回の異界人か…何だか、至つて普通じゃん？」

「往々にしてそのようなものです、アスラハ殿。それよりも中に通したいのですが、よろしいですか？」

「ちよつち、待つて…ああ、うん、そうそう…分かりました。…いひつてやー。」

そういうひつてアスラハと呼ばれた彼は何も無い空に向かつて話し始めた。…び、病氣？…いやきっとファンタジー的な何かでは？

「…毎度の事ながら異界人をからかう為にこの作業するのが煩わしいのですが…」

「君も、言つね。まあ、なんだかんだ云つても俺軽いほうだからねえ。他の人だつたら首から上なくなつてるよー？」

「貴方ですから」

「昔はもつと慌ててくれたのに、詰まんなく成つちまつてさ。んじやおつかれさん、付いてきな少年。」

そういうひつて彼は扉開けて入つていった。やけに兵士と親しげなのが気にはなるけど…取り合はず周囲を見渡すと応接間があつたところに比べてみずぼらしい印象を受ける一角にその扉はあつた。…ぼおつとしておらずにわいつと中に入る。そして若干慌てて扉の中に飛び込んでいった。

一、『質疑応答、そして』（後書き）

投稿一回目となりました。カツラ塚左です。

盛大に風呂敷を広げてしまつてアイタタタ感を感じてしまつていますが、畳んで見せます…畳めるといいなあ…。

異世界つてこんな対応も当然あると思うんですよ。いつも勇者とか英雄とか求めてるわけではありませんし。むしろ労働力が欲しい！とも考へてゐるのでは？とか妄想した結果こうなりました。話の流れがおかしくならないように意識したのですが、何分不慣れなので違和感を感じるところが多くあるやも知れません。

それでは、またいつか。

一、『手に職を、地に足を』（前書き）

文字数だけ増えていつても内容が全くといっていいほど進んでいません。

コレが所謂進行が亀状態でしょうか？

何はともあれ、こんな駄文でも読んでいただけたら幸いです。

一、『手に職を、地に足を』

中に入ると扉の前にいたアスラハと呼ばれていた男性が魔方陣みたいなものが描かれ、その中心に玉らしきものが鎮座されている台の隣に立っているだけだった。

「？…すみません、中に他に誰か居たのでは？」

「へへ…やっぱそう思う?…こういう新鮮な反応が嬉しいのヤー」

「…？…ああ、なるほど…それで先ほどの兵士やんとの会話といつわけですね?」

「はーい、『名答』。大概異界人混乱してくれるから楽しいのよ。最も今はさつきのあいつがばらしちゃった様なもんだけぞ」

「どことなく拗ねたような表情をして、彼は手を頭の後ろに組んで云つた。この人は他の人に比べてフレンドリ なのかもしない。…そういうばく何で言葉が通じるのだろうか?なんとなく答えてくれる気がするので、早速聞いてみようかな。

「あの、一つ疑問があつたのですが…聞いてもいいですか?」

「うん?あー、いいよ」

「先程からなんで言葉が通じるのでしようか?日本語が母国語、なんてことは無いでしょ?うし…」

「あーそれね。君の言つてホン「コ?はどんな言葉か知らないけど、ここに落とされたことで自動的に言語をこっちの言語に上書きしてるので。非人道的つしょ?まあ、それでも住めば都というか、慣れれば悪いことばっかりじゃないわけよ。…相変わらずあの方はそういう説明省いたんだねエ」

「……上書ききてどうやって、ですか?」

少し情けなくも声を震わせてしまったのもしょうがないと思つ。これは、本当に、仮にもといった場所に戻れたとしても駄目かもしれない。あちらに何か心残りがあるのか、と云えればそうではない。そうではないのだが、失くしてしまつたと考えるにはあまりにも大きなものだった。少なくとも僕にとっては。家族は、心配してくれてる…といいな…。なんともいえないもやもやしたものが胸の内で息づくのをその時確かに感じた。これは寂寥感なのだろうか…。まだ青年と少年の間を彷徨い、モラトリアムな僕にはいまいち分からなかつた。

「それは…、どうだらうかね。俺はそれに関しちゃあ門外漢なんですね。まつ、そんな考えてもしようがない事は忘れて、今、君が、何の為にここに連れてこられたか、考えようか？」

「…でも……いや、そうですね。確か適正職というのを測定する、でしたか？」

そう答えると、何が嬉しいのかにせんと締りの無い表情をして彼は台の上に鎮座している玉に手を翳した。そうすると周りの魔方陣らしきものが回り始めた。…え？ 回るの？ 光つたりするんじゃなくて？ 予想とは違った動きに少しばかり硬直してしまつた。それを彼は勘違いしたのか、優しく諭すような声を掛けてくれた。

「あ、身構えなくてもいいよ。体に危険はないから。これはねエ、翳した手からその人の情報を読み取り、適正職を何個か上げてくれるものなんだよ。どこに上げてくれるかは、最初に頭の中に声が響くのを、ついでほら、そこにあるレーニンで表示されるから」

彼が指差した方向には先程まで壁だと思っていたものが、今日何回か見たことある電光掲示板もどきがあつた。これ、もしかしてステルス的な機能も持つてているのか、名前はレーニンっていうのかと

いう驚きを感じた。しばらくすると掲示板（レーニンなんて某国の歴代大統領みたいな名称を呼べるはずがない）に文字が表示された。…それが読めるって事が本当に言語が上書きされているって事だらうか、と些か落ちするものを感じてしまったのもしょうがないのではないだろうか？

「読めるよね？まあ、ここは俺が読んでおこうか。適正100・ライフ・マイカ契約擬似鍊命師、適正67・5・詐欺師、適正65・商人、適正1・奴隸、適正・（マイナス）・兵士…といつぐらいにさ。どう、分かりやすいでしょ？基本一番適正高いやつ選んだほうがいいよ。ひつくりの選ぶと苦労しかしないから。それでもいいなら、止めないけど…どうなつても自己責任でようじへ」

適正のマイナスってなんだと、契約擬似鍊命師とか、詐欺師つて適性あるのは貴方どんな人だよとかよりもさり気無くある奴隸が恐ろしかった。奴隸もれっきとした職業、なのだろうか…。もし奴隸って出たらどうしたらいいのだろうか…。今は考えないようにしておくこととする。

「えっと…ここに手を翳せばいいのです、よね？」
「そう、そう。んじゃ、一旦手離すぞ」

翳していた手を離すと先程までグルグルと蠢いていた魔法陣は、すっかり影を潜めて最初に見たように、よく分からぬ文様へと戻つた。それと同時にアスラハさんの適正職が表示されていた掲示板も光を失い、最初のようなただの壁となつたようだ。どのような原理かは全く分からぬが、凄いとしか言いようが無い。そうとしか表現できない自身の語彙力不足に情けないやら、悔しいやら微妙な感情を持て余したことはここだけの秘密である。

「さつて、と。お待ちかねの適正職検査の時間だー。そう身構えな
さんな。結果は変わらないんだからさ、ここはどーんと構えてれば
いいのや」

「はい、分かりました」

その言葉を信じて、おつかなびつくりしつつ玉に手を翳した。す
ると先程までとは違った文様の動きとなつた。もしかして個人個人
によつて文様の変動パターンが用意されているのだろうか? だとし
たら無駄に芸が細かいと思わざるを得ない。そんなことを考えてい
ると頭の中に妙な声が響いた。それは何処か子供独特の甲高い声の
ようであり、変声期を向かえ大人の声になりつつある声の様でもあ
り、どことなくこちらをあざ笑つている…いや、愉しんでいる様な
声に思えた。

貴様の適正職を発表しよう。適正105・煙奏者（ハイ・スモーカー）、
人イザン、適正55・ディーラー、適正30・一般市民、適正2・丁稚、
適正 -・武器の扱い全般

待て、待つて、待つてください。お願いします。職業で煙奏者（ハイ・スモーカー）
てどんな職業だよ! そもそも適正が100超えるなんてありか!?
後何が出来るかさっぱり分からないつての! あれが、暇な一日ニコ
チン摂取（この世界にあるかどうか定かではない）をしていれば給
料が入る素敵なお仕事というのか。残念、僕はニコチン中毒の愛煙
者ではないのだ。というかそもそもそんな年齢に達していない…よ
つて無理。次は…職人?（アルティザン）なんの職人かさっぱりだ。ディーラー? 販
売業でもしろつて事か? この世界で? 無理じゃないか? 一般市民?
これにしたいつ…! でもつ、無理つ! そんな職業選んだら美少女が
云つていた『それ以下の扱い』にされてしまうのでは? いや、確實
になる。丁稚も却下。適正 -は…どうなのだろう?

結論としてアスラハさんに聞く、これ一択では無いだろうか。

「職業について聞いてもいいですか？」

「うん？あー、待つて。多分もつちょいでレーニンに表示されるはずだからさ」

するとタイミングを計ったかのように掲示板に僕の適正職が表示された。相も変わらずよく分からぬ職業ばかりに見える。要、説明な職業が多いのは何故だろうか。これは嫌がらせではないのだろうか。そんなことを考えつつ近くにいるアスラハさんの表情を窺うと、なんともいえない微妙な表情をしていた。地雷職か何かだったとしたらどんなでもない事になってしまふ気がひしひししてきた。

「これは…ふーん

「いや、一人で納得していないで説明をして貰いたいのですけど…？」

「あー、そだねエ。んじや、説明するさ。まずは煙奏者(ヘビヤ・スマーカー)つてのは…

なんというか薬物を体の中で栽培、飼育してそれを体内で調合することが可能な職業さ。人型の生物兵器みたいなもんさ。ついで、職(イザン)人は芸術的な方向における職人を指してるんさ。この職業の適正があるって事は完成が豊だつて事。それは良い事だと俺は思うわけさ。んで、ディーラーは…んーなんというかイカサマ師みたいなもんさ。あとは、まあ説明なくともいいっしょ？」

「やたら物騒な職業ですね、煙奏者(ヘビヤ・スマーカー)つて。他の職業も不安ですし…

「ここは大人しく適正を信じてそれを選んだほうが、無難でしょう、かね？」

「それがいいやー。なんだかんだ云つてもあの職業はなううと思つてもなかなか成れるもんじゃないし、価値あるもんなのさ」

なんとなくアスラハさんの云いたいことがなんとなく感じられた。他の職業なら件の美少女にとつて価値を認められない、即ち、不必

要だという事を暗に教えてくれたのではないだろうか。僕はそう思うことにした。どっちにしても、何があるか分からぬなら自衛の手段を身につける必要があるだろう。身の安全など保障されているわけでも何でもないのだから。

「そう、ですね。この煙奏者ペピイ・スモーカーにします」

「そつか。んなら、次はそれを報告するところへ行こう。」そのまま俺が案内してもいいんだけど、生憎他にもお仕事があつて手が離せないのさ。仕方ないから違うモノに案内させるさー。」

僕とアスラハさんしか居ないこの場所で他の誰かに案内させると「…すみません、アスラハさん。案内つてコレにさせる気ですか？」
「ああ、そつさ。そういうや、説明してなかつたねエ。俺の職業は読んで字のごとく、無機物、有機物問わず魂が無いものに命を与える職業なのさ。ま、条件はあるけど。兎に角、『仮初の生を謳歌し、そうあれかしを胸に此度の生を経験とす』…無常なる生、発動つと」

彼が呪文なのか、祝詞なのかよく分からぬ言葉を朗々と読み上げると、先程までピクリとも反応しなかつた人形が妙に人間くさい動作で立ち上がつた。ファンタジーというよりもホラー的要素を感じてしまったのはしょうがないと思う。

「コレ扱いは失礼」

「え！？この声って、…もしかして…」

「多分そのもしかしてさー」

声の聞こえた方向に視線を向けるとそこには予想通り彼女（？）が立っていた。此方に視線を向けないのは僕がコレ扱いしたからなのだろうか。…多分そうなのだろう。

「どうも、初めまして」

「初めまして。君は…えーっとなんて呼べばいいのでしょうか？」

「それより貴方の名前を先に教えるべき」

「そういや、俺も少年の名前聞いてないぞ」

「…？あれ云つてませんでしたか？失礼しました。僕は^{わざじひなこ}次久といいます。此方の世界では余りなじみの無い名前とは思いますが、よろしくお願ひします。」

「確かに余り聞かない名前だなあ。ヒサシだけ？覚えとくよ、多分」

「ヒサシ…記憶完了」

「んじゃ、ヒサチーの案内頼むよ、^{たゆたせ}多油靈」

「畏まりました、主人。…では付いてくるよ！」^てヒサシ。くれぐれも逸れない様に」

そういうてアスラハさんは多油靈さん（一応年上なのだろうか？）は連れ立つて扉の前まで歩いていった。それに遅れないよう付いていく。扉の前につくと彼はこちらに振り向きながら扉を押し開いた。

「次いつ会う機会あるか分かんねエけど、いつかまた会つときまで

元気で居るといいぞ」

「主人はちょっと照れてる」

「いらん事云わんでいいつての。まあ、こつから俺は別の仕事があるからさ、精々気を引き締めるといった。皆が皆こう軽いわけじゃねえからさ」

「素敵な忠告。ああ、恥ずかしや」

「はい、はい。したらなー」

「あ、はい。ありがとうございます。」

そういうって彼は僕が来た方向とは逆に歩いていった。遠ざかる背中越しにちょっと恥ずかしさを覚えていいのか、頭を搔きながら。そんな彼の様子に何処か安らぐのを感じた。

「いつまでも主人の美尻を眺めているヒサシは変態?..」

「いや、そんな趣味ありませんから。本当に」

その声でふと現実に戻された。安らいでいる場合ではなく、まだ一次面接が終わったばかりで、次の面接がある…と考えておいたほうがいいだろう。

「そり。くれぐれも逸れないよつに来る」

何故か氣落ちしたような多油靈さんの声に疑問を覚えるも、確かにその通りだと、確りしようと氣を引き締めた。まだまだ長い一日に成りそうだ。そんなことを思いながら僕の前にいる人形に付かず離れずの距離を維持したままついていった。

多油靈さんは会話を少し試みるも、共通の話題も無く、疑問もたやすく答えてくれるはずも無いので弾むことなく一言、一言で終ってしまった。その後の沈黙は重苦しいものではなく、なんだか気が楽だったのが、自分の事ながら不思議だった。

「まもなく、職定所に着く」

「そうですか。道案内ありがとうございます」

「これが仕事」

「いえ、それでもありがとうございました。つい、アスラハさんにも伝えてください」

「そう」

それきり彼女は口を紡ぎ黙々と先程と同じ速さで歩いていった。その後の付かず離れずの距離を維持したままの僕が続く。もしかして彼女もアスラハさんと同じでちょっと照れているのだろうか？…そうだと、なんだか嬉しい。そうして歩いていくと適正職を調べる部屋があつた一角とは違い、清涼な空気漂う雰囲気を感じた。そうして気付く。これが『マガ』の影響のない本来の空気なのだろうか。何だかんだ云つても人間の体の適応力は素晴らしい…そう思う。思わないと不安で仕方ない。

「案内はここまで。あの角を曲がった先にある一つ田の扉が職定所」

「分かりました。本当にあり…」

「何度も礼を言われるほどのこととしたわけではない。よって礼は不要」

「それもそうですね」

「ではこれにて失礼」

そう云つて彼女は今までそこにいたといつのが嘘のよう一瞬で目の前から居なくなつた。どうなつているのやら…。考へても仕方ないので頭のメモ帳に瞬間移動、もしくはステルス的な能力を備えているかも、と記帳しておいた。彼女が居なくなつた場所を暫し見てから云われたとおり角を曲がつてみると、その先には扉があつた。あまり遅れるといけないかなと考え少しばかり早歩きで扉まで近づいていった。

「一応、ノックしたほうがいい…かな」

そう呟きつつ、ドアを一回叩く。回数に意味があつた気がするけど、そんな事を事細かに覚えている人間ではなかつたのであやふやである。そんな今までを若干後悔しつつ中からの返事を待つこと数瞬、

「入りました」

その声に従い扉を開けて中に入つていった。

「それで少年の名前、適正職、その他もうひとつ記録するわけだが、覚悟はいいかね？」

開口するや否や最後に覚悟を持つてきた。目の前には僕と同じで糸田っぽい女性がいた。それで居ながら強かでどこと無く猫っぽい印象を受けた。笑うというよりも囁うという表現がぴったり合った。まだ一言も言葉を交わしていないのにそんな風に思った。また彼女とショートボブの組み合わせは驚くほどぴったりだった。まるでその髪形は彼女のためにあるかのようだつた。いや、それはいい過ぎな気がする。服は全体的にゆつたりとしたローブに覆われてどうのような服装を中心に着ているか確認できない。今はそんなことはどうでもいい。この部屋は先程まで居た部屋と違いまわりに何人の同じような格好をした人たちが居た。

「…はい。あと、質問よろしいですか？」

「質問は此方がするものであり、其方からの質問は基本的に受け付けない。…しかし、少年は異界人故に少々のことには目を瞑る。ただし、質問は一つまでだが、よろしいかな？」

「…でしたら、今はまだいいです。」

「それは結構。では質問だ。名前、適正職、年齢をまず答えてもらおう」

「はい。名前は笹次久です。適正職は煙奏者で、17歳です。」

「ほう、なかなか面白いな。次はこの宝玉が置いてあるところに手を置いてもらおうか」

煙奏者で僅かに目を細めるものの、反応らしい反応はそれだけだった。彼女に言われた通り手を宝玉の上に重ねる。すると、

「つー？」

「ほう、手を離さないか。そこは評価してやる」

掌に僅かな痛みが走る。反射的に手を離しそうに成るも、必至に

「気合で押しつぶしめる。…彼女の反応を窺つた悪くは無こよつだ。

「これにて完了だ。後はヒサシ少年の為に用意された客人用の部屋で沙汰があるまで待つがいい…と、言いたいところだが、質問を一つ許すといった手前だ。私が答えられる質問に答えてやります」

「（多分さつきの痛みは掌に何か印字、情報の確認、情報の取得、僕の生体反応の捕捉用に何かしら埋め込んだ等々と考えるべきだろうか？今はそんな事を聞いたってしようがないかな。終わつたことだし）そうですか…でしたら、僕と一緒に呼び落とされた二人はどうしていますか？」

「そつちか…。二人とももう我々が用意した部屋にて休息を取つているはずだ。こんな質問で良かつたのか？」

「はい、気がかりでしたので」

もしかしたら適正職が残念でもう会えないかもしぬなかつたし、とは口に出さない。少ししか件の美少女とは会話していなければ、彼女なら躊躇無く実行するだらう事が予想できた。徹底的な合理主義…それが現状における僕の彼女への認識だ。故に部屋で休んでいるということは、少なくとも価値のある適正職だつたと予想が立つ。…もしかしたら外れているかも知れないけど。

「そうか、なら部屋まで案内してやろう。トゥーダー、案内してやれ

「はつ…」

トゥーダーと呼ばれたロープを着込んだ壯年の男性の背中に付いていき、扉を開け外に出た瞬間、声が聞こえた。

「ではな。そう遠くない内にまた会つだら」

思わず反応して振り向くも、目の前にあるのは無機質な扉だけで

あつた。幻聴…というわけではないと思ひナビ、なんとなく耳にやたら残る声だつた。

歩くこと十数分、そうして用意された部屋着き、すぐに椅子に座つてゐるだれでいる僕が居た。

今日を振り返るとろくでもない事ばかり、信じられないことばかり、不安なことばかりときたものだ。しかも現状自身がどんな扱いとされるか定かではないということがまた不安を煽つてくれる。流れるような対応から異界人というのもそう珍しいものではないのだろう、この国では。他の国にとつてはどうか分からぬ。珍しいかも知れないし、珍しくないかも知れない。与えられた情報は精々触り程度だろう。結局使い潰されるのだろうか？いや、まだ判断材料が足りない。

本日の知つたことは多い。多いけどこの情報が僕にとつて大切などうかというとそれも分からぬ。結局、分からぬという事が分かつただけ。『マガ』、『ハイジン』、『異界人』、『適正職』、『トレオン帝国』、『法理氣』重要な言葉は他にも散りばめられていたかも知れない。でも、正直色々あって無性に眠い。今はこの睡魔に身を委ねて眠つてしまいたい。…起きた時に誰か目の前に立つてるなんてホラーな事がないといいな。なんて事を考えながら僕の意識は霧散していった。

一、「手に職を、地に足を」（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

あれですね、基本更新も遅く、内容の進行も龜…。つといけませんね。
考えながら打つてするのが駄目なんでしょうね。

プロットなし、且つ処女作でここまで出来るか自分でも分かりませ
んが、完結まで何とか持つていきたいものです。

それでは、またいつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8536m/>

無我の大地

2010年10月13日05時33分発行